NYC 研修プログラムについて
華岡晃生

私はこの度、金沢大学附属病院初期臨床研修医として 2018/8/17-8/31 の約 2 週間、ニューヨーク海外研修へ参加しました。

医学部 5 年次に同プログラムに参加し、私にとっての 2 回度目のニューヨーク研修となりました。医学生から研修医へと立場が変わり、その間に様々なことを経験しました。立場や視点が変化して、今回の研修もとても新鮮で学びの多いものとなりました。始めにプログラム概要、それからプログラムを通して学んだことを述べたいと思います。

◆医学英語　ペース大学

ペース大学では医師・患者のロールプレイ、症例プレゼンなどの医学英語を 3 日間にかけて学習しました。この授業を通じて英語を話す上での基本的なコミュニケーション作法を学び、更に英文法や発音の修正を細かく指摘して頂きました。

終始暖かい雰囲気で授業は進み、ニューヨークに到着した直後で英語を話すことに抵抗のある我々の緊張を和らぐ良い機会となりました。

◆ブロードウェイで活躍する由水南さんのワークショップ

金沢泉丘高校出身で、ブロードウェイの舞台でご活躍されている由水南さんにワークショップを開いて頂きました。南さんとお会いするのは 2 度目でとても刺激的な体験なりました。

特に印象に残っているのは「The sky is the limit」のフレーズです。「何事も限界を決めているのは自分自身だ」との意味です。幾多の挫折を経験しても諦めずに夢を叶えた南さんらしいフレーズでした。また、諦めずに夢を叶えた背景にも「周囲への感謝の気持ち」を強調されており、南さんの強さの秘訣が垣間見えました。

◆医療面接シュミレーショントレーニング

模擬患者さん相手に 10 症例×2 日間の医療面接、 5 症例×1 日間の身体診察を行いました。模擬患者の皆さんは俳優・女優として活躍される方々で、実際の患者さんのような緊張感の中で問診や身体診察に挑みます。医療面接の直後にフィードバックの時間があり、その都度患者としてどういう印象を受けたか、具体的な改善方法や英語の文法間違いなどの指摘を得られます。日本ではここまで手厚く医療面接の指導を受けられないため素晴らしい機会でした。

日本でも模擬患者さんのトレーニングや OSCE 試験はありますが、アメリカの医学部では医療面接シミュレーショントレーニングを通じて、実際の臨床に立つ前に医師としての予行練習が徹底されていました。

◆Mt. Sinai Medical school & Hospital & Laboratory　サトコさんとのランチ

Mt.Sinai Medical school の医学生に医学部を案内して頂きました。日米間の医学部システムや教育プログラムの相違点や類似点を肌に体感する貴重な機会となりました。

医学部見学の後、石川県出身で現在ニューヨークで看護師として活躍される山田朋葉さんにお会いしました。多様な背景を持つ患者さんたちとどのように関係性を積み上げていくかという話の中で、「日常の中で色々なことに興味を持ち、患者さんとの鍵と鍵穴の鍵を作っている」という話が心に残りました。

その後に森下先生の研究室を訪問しました。言語獲得や視覚・聴覚の発達できるリミットである「臨界期」をベースに臨床応用できないか研究されていました。研究室の見学もさせて頂き、 益々研究への興味がかき立てられた訪問でした。

◆Shadowing

NY 研修の後半の 3 日間は、実際に NY の病院で働かれている日本人ドクターに付いて実習および見学させて頂きました。今回お世話になったドクターは JMSA（Japan Medical Society of America）に所属されており、私が 2 日間付かせて頂いた先生は Bronx にある Community HealthCare Network という病院で診療されている金原先生です。Bronx は、NY の Manhattan から地下鉄を用いて約 20 分で到達することができます。しかし、マンハッタンとはがらりと雰囲気が変化し、居住者のほとんどはヒスパニックの移民や難民の方々であり、英語よりもスペイン語がよく通じる地域でした。

金原先生は患者さんとより円滑に意思疎通を図るためにスペイン語を習得し、患者さんに寄り添った医療を実践されていました。患者さんの複雑な多岐に渡る要求に答えるために時には、感染症医、精神科医、内科医、小児科医、婦人会、はたまたソーシャルワーカーというように沢山の役割をこなしていました。「私は患者さんから多くのことを学んでいる」と笑顔で話す姿はとても印象的で、金原先生の医師としての姿勢に感動しました。

私がこのニューヨーク研修で通じて感じたことは様々な境界です。日本で生活をしていると同じ人種、比較的同じ所得層、同じ学問を専攻する人たちなど同類に囲まれていることが多いです。俗に言う村社会です。最近ではテクノロジーの発展が進み、携帯電話やインターネット、ニュース番組で世界と繋がっているように感じ、いろいろな境界が見えにくくなっているような気がします。しかし、ニューヨークへ行くと立ちどころに境界が目の前に現れました。例えば、多様な人種、文化背景、様々な分野で活躍する人、さらに格差社会です。

ここで私が強調したいのは境界が「ある」あるい「ない」ことに対する善悪ではなく、境界を認識することで他者理解が深まることや、自分自身を境界の向こう側に持ちやることができるということです。ニューヨーク研修では多岐にわたる経験を通じて、多方面での自分とその他のものの「境界」が見えてきました。そして、この点がニューヨーク研修の最大の魅力であると考えます。

金原先生のように患者さんや人間、そして生命から学ぶ姿勢を忘れず。朋葉さんのように日常生活の些細な側面から多種多様な文化や歴史などの興味を紡いだ鍵と鍵穴を見つけ。南さんのように周囲の感謝を忘れずに自身の夢や目標に真っ直ぐ進みたいと思います。

NY 研修を総指揮してくださった Andrew Schneider 先生、機会をくださった米谷先生、研修センターの皆様、研修を通して出会った全ての方に感謝申し上げます。